

収容所生まれの 転生幼女は囚人達と 楽しく暮らしたい 3



三園 七詩

Illustration

喜ノ崎ユオ

登場人物紹介

イーサン

かつて執事として
ミラの母メアリーに
仕えていた。
現在はビジネスオーナー
として活躍中。

ビオス

元料理人で、囚人ながら
収容所の食事係を担当。
不愛想だが腕は抜群。

ローガン

収容所の財務管理を
している囚人。
頭が良く、看守の弱みを
いくつも握っている。

ハーパー

希少種族のエルフ。
ひねくれたところもあるが、
心を許した人の前では素直。
相棒は小鳥の魔獣ノア。

メイソン

怪我の治療が得意な元医者。
クールながらも、
ミラの体調管理には
人一倍熱心。

ジョン

正義感が強く、
面倒見の良い青年。
悪徳貴族と争い、
収容所に入ることに。

ミラ

収容所で生まれた少女。
優しい性格で、囚人の皆が大好き。
前世の記憶と不思議な力を持っている。

プロローグ

私はミラ、このサンサギョウ収容所しゆうようじょで生まれた。

ママは私を産むと同時に亡なくなってしまったらしい。でも私は全然寂さびしくない。

なぜならここには私を育ててくれた親代わりの囚人のみんながいるからだ。

まずはママの隣となりの牢屋ろうやにいたジョンさん、私はジョンさんの牢屋を少し改造した所で隠かくれて暮らしている。ジョンさんは心配性で怒ると怖いけど、普段はとっても私に甘あまいのだ。

そしてローガンさん、この収容所でも囚人に頼られている人だ。普段は頭の切れる冷たい印象だけど、私の前ではニコニコ笑った顔しか見せなくてとっても優しい。

メイソンさんは元お医者さんで私の体調管理などをしてくれている。怪我けがをすると悲しそうな顔で心配するので、気をつけている。

最後にハーパー。見た目は私より少し大きいくらいだけど、年齢は凄すごく年上のエルフだ。しかし性格は面倒くさがりのお兄ちゃんって感じ。可愛い小鳥の魔獣まじゅう、ノアいつも一緒にいて私という時は穏やかに笑う姿を見せてくれる。

こんな賑やかな家族に囲まれているから、私は全然寂さびしくなかった。

収容所では私の存在は看守達かんしゅには隠している。それ以外にも私には前世の記憶があるという秘密

があった。

それでもうひとつ、私には人を癒す力があるみたい。

その力のおかげで看守のロイズさんの娘さんを助けたことから、看守の味方も出来た。色々トラブルはあるけれど、私は収容所のみんなといられて幸せだった。

一 日常

今日もいつもと同じように、ジョンさんの牢屋で目を覚ます。

「おはよう」

起き上がって近くにいたジョンさんに声をかけると、ジョンさんも同じように起き上がって笑顔で挨拶を返してくれた。

二人であくびをしながら着替えを終えると、ジョンさんが洗濯物回収のカートを持ってくる。これは器用な囚人が私の移動用として改造してくれたものだった。

「用意はいいか？」

ジョンさんに言われて頷くと、ジョンさんがカートに手を伸ばして蓋を開ける。そこには私がすっぽりと隠られる空間があった。ジョンさんに抱っこされて中に入ると蓋が閉じられる。

そして上から洗濯物を載せられると、移動していくのが分かった。

そのまましばらくすると、囚人達から声がかけられる。

「おはよう、はい洗濯物」

「俺のも頼む、おはよう」

みんなが優しい声でカートに向かって挨拶している。これは私に声をかけているのだろう。

私は心の中で「おはよう」と返事をしながら、ジョンさんがカートを押して歩くのを感じていた。そのままカートは食堂まで移動する。

そして食堂の奥へ行くと、声をかけられた。

「ほら、着いたぞ」

その声に私は蓋を開いた。

「んー！」

ずっと屈んでいたので気持ちよく伸びをする。

「よっと、あー、そろそろこいつも変えないとかな」

ジョンさんは私を降ろしながらカートを確認した。

確かに最近少し中が窮屈になった気がする。

「そーいや最近重くもなったな」

ジョンさんはそう言って、ポンと私の頭に手を置いた。私はプクッと頬を膨らませてジョンさんを睨み上げた。

「女の子に重いはないんじゃない！」

デリカシーのないジョンさんに文句を言った。

「ち、違う。成長してるって事だよ」

ジョンさんの慌てる姿をさらにジロつと睨んでいると、後ろから抱き上げられた。

「こんなに軽いのに、ジョンは酷いですね」

「あっ、ローガンさんおはよう」

抱き上げたのはローガンさんで、笑みを浮かべていた。

「ミラはこの年では平均より軽いくらいだ、もっと太らせないと」

その後ろにはメイソンさんがいて、私の手を掴んで診察するように見ている。

「うーん、でもこちら辺はいい肉つきだね。昨日ケーキ三個も食べてたもんね」

反対側にはハーパーがいて、私のほっぺをつくとニヤニヤと笑っていた。

「それは美味しいから仕方ないの！」

私は慌ててほっぺたを両手で隠した。

「何言ってるんだ、ミラの頬はこのくらいが一番可愛い！」

ジョンさんが真剣な表情で私の顔をジッと見つめている。その様子にさらに恥ずかしくなり顔を隠した。

「冗談だよミラ。お詫びに今日のデザートあげるから機嫌直しな」

「本当に？」

ハーパーの言葉を聞いて、チラッと顔を上げる。ハーパーはニコツと笑うとおいでと手を広げた。

私は抱っこしていたローガンさんに視線を送るとハーパーの方に手を伸ばす。

ハーパーは小柄な体なのに軽々と私を抱き上げた。その肩にはノアがいて、私が近づくと髪をくちばしでつついて挨拶してくる。

「ノアもおはよう」

私は優しい過保護なみんなに連れられて食堂を進んでいく。

「おう、ミラおはよう。なんだ今日はハーパーに抱っこされているのか？」

すると、調理部の責任者であるビオスさんが朝食の用意をしながら声をかけてきた。

私もこの食堂で働いていたが、今はその中でも製菓部、というお菓子を作る部署で働いている。

「ビオスさんおはよう。ハーパーが今日はデザートくれるって言うから」

私が慌てて答えるとビオスさんは分かったと笑っている。

「ならハーパーのデザートは多めにしといてやる」

ハーパーが皿を受け取るとそこには蒸しケーキが二個載っていた。

「ありがとう！」

私はビオスさんにお礼を言う。

私の朝食はジョンさんが受け取ってくれて、お決まりの席へと移動する。

この席は食堂の入口から見えにくい場所にあり、看守が来たらすぐに隠られるようになっていた。

最近は看守との関係も良好で、よっぽどの事がない限り食堂の中まで入ってこない。だから私達

はゆつくりと食事を堪能する事が出来た。

「ほらミラ、たくさん食えよ」

「はい！」

ジョンさんが料理の載ったお盆を前に置くと、私は早速スプーンを掴んだ。まずはスープだ！ズツと吸い込むと、優しい野菜の味がする。

「うん、これはルイスさんのスープだ。美味しい」

作った人を想像しながらもう一口飲むと、隣のポテトサラダに目が向いた。

それを同じスプーンですくい、ひと口で食べる。

いろんな食感の野菜がポテトに絡み、マヨネーズの酸味で上手く纏まっている。

「うん、ビオスさんの味つけはやっぱり最高！」

今度はパンを掴むとポテトサラダを載せて一緒に食べた。

今日は少し硬めのパンだけど、それがポテトサラダによく合っていて美味しい。私はあつという間にパンとスープとポテトサラダを食べ終わると、デザートに目を向ける。

「はい、ミラどうぞ」

すると約束通りハーパーがデザートの蒸しケーキを二個くれた。

私は並んだケーキを見つめると、元々載っていたケーキを掴んでハーパーに渡した。

「え？これはミラでしょ、約束通り全部食べていいよ」

ハーパーが断るが私は首を横に振る。

「ハーパーの分は約束通りもらうけど、これは私からハーパーにあげるの」だから一緒に食べようと笑うと、ハーパーは苦笑してケーキを受け取る。私達のやり取りにみんなも微笑みを浮かべながら、ケーキと一緒に食べた。

「ふーお腹いっぱい！」

食事が終わり、私は少し盛り上がったお腹を優しく撫でると、椅子の背に寄りかかった。倒れそうになるとジョンさんが慌てて背もたれを押さえてくれる。

「危ないな、気をつけろ」

「ごめんなさい」

私はよいしょと椅子から降りるとみんなの方を向いた。

「じゃあお仕事行ってきます！みんなも頑張つてね」

「行つてらっしゃい」

「頑張れよ」

みんなも立ち上がると食器を片付けて、各々仕事場に向かっていった。

私は食堂の隣が仕事場なのでそのまま厨房に向かう。

私専用の小さなエプロンをつけると腕まくりをした。

「さあ、やるぞー」

「ミラ、ほどほどいいからな」

「ミラちゃんおはよう！」

「一緒に頑張ろ」

調理部のみんなから挨拶と激励をもらうと私はそれに答える。

そしていつも通り作業をしているとトントんと扉がノックされた。私は急いで近くの地面にある、私専用の隠れるスペースに滑りこんだ。

この動きも慣れたもので、みんなも私が見えなくなるように上手く移動してくれている。

「みんなおはよう、今日もケーキの注文が増えてるから頑張ってくれ」

扉から入ってきたのは、製菓部を取り仕切る看守のロイズさんだった。

ロイズさんはこの看守だが、娘のモニカが重症になり、それを私が治した事がきっかけで知り合いになった。

私がここにいる事も秘密にしてくれているので、ここで唯一姿を見せられる看守だった。

「なーんだロイズさんか、びつくりした」

私はロイズさんが扉に鍵をかける音に安堵しながら顔を見せる。

「ミラちゃんおはよう！ 今日美味しいケーキ期待してるよ。あとこれ、いつもの娘からの手紙だよ」

「わー嬉しい！ 後でゆっくり読むね！」

モニカを治してから、二人で時折手紙の交換をしている。ロイズさんはそれを毎回運んでくれているのだ。

私は手紙を受け取ると大事にしまつて仕事に戻った。

ロイズさんがいる間はここに他の看守が入ってくる事はないので、安心して仕事ができる。

「ねえミラちゃん、今度の新作のデザートはこんなものでいいかな？」

すると製菓部の一人が私のもとに出来たてのデザートを持ってきた。

「うん、いい感じに揚がつてると思うよ！ 串を刺して生地がつかなければ大丈夫」

私はそう言つて細い串を生地に刺した。

「しかし本当にミラちゃんは凄いね、これもいい匂いで……早く試食したいよ」

ロイズさんが私達のやり取りに顔を覗かせた。

今作っているのは製菓部の新しいデザートのドーナツだった。ここの蒸しケーキも私の前世の記憶を頼りにビオスさん達みんなで試行錯誤しながら作ったものだ。

私は前世の記憶はあるが、スイーツを実際に作った事はないので、みんなに説明しながら工夫して作っている。

このドーナツは材料はほとんど蒸しケーキと変えずに、生地を油で揚げれば出来上がりだ。

油も最初は高価で中々使えなかったのだが、ビオスさんとロイズさんがなんとかしてくれた。

なんでも油が出る木の実があるらしく、それを購入して搾って抽出するらしい。少し手間はかかるらしいけど、人手はあるのでそこは問題ない。

そんな自家製の油で生地を揚げる。本当は真ん中に穴を開けた形にしたかったが、みんなから意味が分からないと却下されてしまった。

私からすればあの形こそドーナツなのにと口を尖らせたものだ。

しかし手間など考えると丸くする方が楽なので、ここでは丸い形のドーナツになっていた。私は持つてきてもらった揚がったばかりのドーナツに、砂糖ときな粉を混ぜた粉をまぶす。砂糖だけだと原料費が高くなりすぎるので、大豆を粉にしたきな粉を混ぜ、節約している。

「じゃあ早速」

まずは私がひと口食べる。きな粉が口の周りにつくが気にせず大きくかぶりついた。

油のジュワツとした感覚がありつつ、外はサクサク中はフワフワで、とても美味しかった。

私が無言でモグモグしていると、みんながシーンとしながら私を見守っていた。

「ど、どう？」

「ミラちゃんなんか言ってる！」

みんなが催促するので、私は口の周りを汚しながら、親指を立ててドヤ顔する。

「美味しい！」

その一言で、待っていたみんなもドーナツに手を伸ばした。

「製菓部に入って一番幸せな瞬間はここだよな」

「こんな美味いもんをみんなより早く味わえるもんない！」

みんなの反応もいいようだ。

「みんな食べすぎないでよー。ジオスさん達と看守長の許可をもらわないと」

私はなくならないように、いくつか別のお皿に取り分けた。

ロイズさんもみんなに交じって早速試食している。

「んまい！ モニカとベラにも早く食わしてやりたいな」

「ロイズさん、今日家に帰るんでしょう？ いくつか持って帰ってモニカ達にあげて」

「本当に!? ミラちゃんありがとう！」

ロイズさんも口の周りにきな粉をつけながら、子供のように歓喜していた。

私は自分の口をしっかりと拭くと、みんなにも口を綺麗にするように声をかける。

そしてロイズさんには看守長用にドーナツの試食を持つていってもらう。

看守長からの評判がよければ、外の世界でスイーツを売る事も出来るのだ。

ロイズさんが部屋を離れるので私は休憩も兼ね、隠し部屋で待機する事になった。

他のみんなは蒸しケーキの作業に戻り、明日の出荷分を作っている。

いつも通りの作業の音を聞いていると気持ちいい疲れもあってウトウトとしてくる。

私はそのまま隠し部屋で眠ってしまった。



俺——ロイズはミラちゃん達が作った新作デザートのだーナツを持って看守長の部屋に向かっていった。

「おー、なんか新しいデザートか？ 町での評判もいいし製菓部は調子いいな」

「後で食堂に寄ってみるかな」

すれ違う同僚達も俺の手元に視線を送りながら、声をかけてくる。

少し前はキーキを巡って古株の看守と揉めたが、そいつらはここを辞めさせられ、今は看守同士は平和だ。しかも穏やかな空気が伝わっているのか、最近は囚人と看守の関係まで良くなっていた。

俺は笑顔で返事をするとそのまま看守長室へと向かった。ノックしてから中に入る。

最初は少し緊張したが、今では看守長の部屋に来るのも多くなり慣れたものだ。

「失礼します。新しい新作のデザートを持ってきました」

ケイジ看守長に声をかけると、仕事をしていた顔を上げて笑顔を見せる。

そして、俺は彼に事情を説明し、試食用のドーナツを渡した。

ケイジ看守長は柔らかなで優しい外見だが、こう見えて敏腕で、この収容所の環境をここまでよくしたのも彼と言っても過言ではない。

悪事を働いていた看守を辞めさせつつ、囚人達にも丁寧に接する事で彼らの仕事の効率も上げている。

製菓部も彼のおかげで出来たもので、この収容所で作ったお菓子を扱う外の店は、今や町での流行りのお店になりつつある。

さらに、少し前にはこの国の王子もウチのお菓子を気に入っていると公言した事もあって、貴族も買いに来る店になっていた。

しかし、そのメニューを考えているのが、この収容所で囚人達に隠されて暮らしている小さな女

の子のミラちゃんというから驚きだ。

そんな事を考えていると、ケイジ看守長が早速新作ドーナツを口に運んでいる。

「んん、今回もとても美味しいものが出来ましたね。ただ口が汚れるのが難点ですから、もう少し小さくして一口で食べられるようにするのはどうでしょう？」

「なるほど！ 製菓部の囚人達に伝えておきます！」

「よろしく。しかしこのお菓子も素晴らしいアイデアですね。なんとという囚人が考えているんですっけ？」

ケイジ看守長がそう言って、近くにあった囚人達の名簿を確認する。

「ちょ、調理部のビオスを中心に、みんなでアイデアを出しているようです」

俺はドキッとしながらも、事前に決めていた通りビオスの名前を口にした。

ミラちゃんのメニューの事で何か言われたら、ビオスの名前を出すように言われていたのだ。

「なるほど、彼の刑期はあと少しのようですね。これなら、調理部の功績を考え、出所を早めてもいいかも知れません」

「ビオスを？」

俺は思わず驚いて口を出してしまふ。

「彼は理不尽な貴族に手を出して、この収容所に入ったようです。しかもその貴族は今、事業で失敗してそれどころではないようです。ビオスを出しても文句など出ないでしょう。それに、他にも何名か冤罪のような事案もありましたね」

そう言いながらペラペラと書類をめくって確認する。

確かにここにいる奴らは、貴族と関わったばかりに重い罪を背負う事になった奴も多い。

看守長はそういった事案の修正も行っているようだ。

「まあ、細かい点はおいおい考えておきますね」

「は、はい」

俺は返事すると皿を下げて部屋を出ていった。そしてそのまま製菓部へと戻っていった。

「ロイズさんどうでした？」

そして製菓部に戻ると、みんなが期待を込めた瞳で俺を見つめてくる。

「あ、ああ。味はもちろん美味いって。ただ口が汚れて食べにくそうだから、少し小さくして一口で食べられると楽じゃないかって」

「なるほど！」

製菓部のみんなはいい事を聞いたとばかりに、早速小さめのものを作ってみる事にしようだ。

「すまん、俺は少し外すけど大丈夫か？」

「あっはい！ ミラちゃんは今寝てるみたいなんで問題ないですよ」

俺は頷きつつ部屋を移動する。そしてビオスを見つけると手招きした。

「ロイズさん、なんかあったか？」

ビオスが手を止めて俺の傍^{そば}にきたので、二人で調理部のみんなから離れたところに行った。

「今新しいデザートを看守長に試食してもらってきた」

「ドーナツか、あれも美味いから問題ないだろ？」

ビオスは自信満々に笑っている。

「ああ、食べやすいように少し改良するみたいだけだな」

俺は説明すると、彼はなるほどと頷いた。

「その時に看守長に誰が考えたかと聞かれたからビオスの名前を出しておいた」

「ありがとうな、それでいい」

「それでな、町での売り上げもいいし、ここで功績をあげたからお前の刑期を短くしてくれるかもしれないそうだ」

「へー、看守長は気前がいいな」

ビオスはあまり深く考えていないようだ。

「おいおい、そうになったら、下手したらもうすぐ出所になるかもしれないんだぞ」

「え？」

すると、まさか出所するとまでは思っていなかったのか、ビオスはポカンとする。

「いや、俺が殴^{なぐ}った貴族が許さんだろ？ 俺が出所したって、またある事ない事言って、俺に罪を着せてくるぞ」

「それがその貴族はお前に構^よってる余裕などないみたいだ。だから外に出る事を考えておけよ。俺でいいなら手も貸すぞ」

ビオスは驚愕した様子で「ああ……」と返事をする、そのまま仕事に戻っていった。フラフラとした様子に俺は大丈夫かと少し不安になった。

二 別れ

「ビオス、看守長がお呼びだ」

ロイズさんに出所に関する話を聞いた翌日、いつも通りに仕事をしているとパッド看守が俺——
ビオス呼びにきた。

「ビオスさん何かしたんですか？」

調理部の囚人達が笑って声をかける。

「なんにもしてねえよ」

俺はなんでもない風に答えるが、内心はあの事かと複雑な気持ちになる。

「あとは俺達がやっておくんで、行ってきていいですよー」

仲間の声に思わず笑った。俺は「頼む」と言ってエプロンを脱ぐと看守の後をついていく。

そのまま歩いていき、看守室の前まで連れてこられる。

「看守長、ビオスを連れてきました！」

看守が声をかけて扉を開けると、中に入れと促される。

看守長室に入るのなど初めてだった俺は、恐る恐る足を踏み入れる。

そこには微笑むケイジ看守長がいた。

柔らかな雰囲気、俺は思わずベコツと頭を下げる。

「お呼びでしょうか？」

「ビオス、急に呼び出して悪かったですね」

ケイジ看守長が俺を上から下までじっくりと見ると、小さく笑う。

「料理人だからかな、結構がっしりしてる」

「体力がないと作れませんから」

ケイジ看守長の言葉に俺が答えると、ウンウンと頷いている。

「君の刑期はあと何年だったかな？」

「俺……いや私はあと五年です」

そう答えると、ケイジ看守長は満足そうに頷く。

「ビオス、一週間後に出所が決まりました。それまでに身辺整理をしておいてください」

「はっ？」

ケイジ看守長の言葉の意味をじっくりと頭の中で反芻する。

「一週間？」

「ええ」

ケイジ看守長が「よかったですね」と笑うが、気持ちの整理がつかない。

「なぜですか？ まだ五年も残っているはずです」

「ここでの仕事の功績と日々の行いから、早めに出所してもいいと判断しました。しかし少し条件があります。あなたはこちらが指定した場所で、最低五年は働いてください」

「……それは収容される場所が変わっただけでは？」

「いいえ、外の世界での過ごし方は自由ですから、ここにいるのとは全く違いますよ。会いたい人もいるんじゃないですか？ 例えばずっと仕事をしてきた相棒とか」

ケイジ看守長がじつと見つめてきた。俺の経歴を知っている彼にはお見通しなのだろう。

「それは、無理です。あんな、つき放すような態度をしたのに今更どの面下げて会えるんだ」

外の世界にいた最後の時の事を思い出し、俺は決まり悪くなって顔を逸らした。

すると、俺の苦々しい顔を見てケイジ看守長は苦笑する。

「まあそれはあなたの自由です。とりあえず出所とその後の事はきちんと守ってください。勤め先はおいおいお知らせします」

「……分かりました」

何を言っても決定事項なのだろうと諦め、俺は頷いた。そのまま部屋を出ていこうとして、ふと思いついたように振り返る。

「この奴らには俺から出所の事を話してもいいでしょうか？」

「ええ」

その言葉を聞いた俺は頭を下げると、そのまま調理場へと戻った。

すると、帰ってくるなり調理部の奴が詰め寄ってくる。

「呼び出してなんだったんですか？」

「最近製菓部も売上いいし、何か褒美でも出たんですか？」

期待を込めた眼差しで聞いてくる。

「いや……俺の出所が決まった」

言いくそくに答えた。すると一瞬シーンとした後に「わあ！」と歓声が上がる。

「おめでとうございます！」

「よかったすね！」

調理部の囚人達は自分の事のように喜んでくれた。

「あ、ありがとう。でも俺がいなくなっただけは平気か？」

調理部の料理はほとんどが俺が監修していた。

「そ、それは大変ですけどどうかします！ ビオスさんは気にせずに普通の監視されない生活に戻ってください」

みんなうんうんと頷いている。

「お前ら、ありがとう」

俺は鼻がツーンとするのを我慢して頭を下げた。



その日から俺はいろんな囚人達に声をかけられるようになった。

みんな祝いの言葉をくれるか、俺の飯が食えなくなるから残念だと苦笑いするばかりだった。そんな中、出所の話を聞いたジョン達が挨拶に訪れた。

「ビオスのおっさん、おめでどう」

ジョンが笑いながら手を差し出してきた。俺はギュッとその手を握りしめる。

「ビオスはここに入るほどの事はしていないからな。当然の結果だろう」

隣にいたメイソンも笑顔で頷いている。

「それを言うならお前らもだろ？」

ジョン達もここに入るような奴らではない事を俺は知っていた。

すると、ローガンが心配そうに聞いてくる。

「しかし急な出所となりましたね。出てからは何を？ あてはあるのですか？」

「看守長が指定する仕事をしろと言われた。もう勤め先は決まってるらしい」

「ふーん、そんな事あるんですね。ここに入ってから初めて聞きました」

ローガンはそう答え、ジョンとメイソンを見るが、彼らも首を傾げている。

やはりこんな事は初めてのようだ。

「まあそれでも自由な生活です。頑張ってください」

ローガンも手を差し出すので俺はその手を掴んだ。

さらにメイソンやハーバーとも言葉を交わした。皆喜んでくれるが、少し気がかりな事もある。

「ミラは？」

俺が尋ねると、ジョンは少し困ったように喋りだす。

「まだ話してない、ここまで近い奴が出所するのはミラが生まれてから初めてだから、俺達もな
んて言っていないか」

ジョンが不安そうな顔をする。

「俺が話す。大丈夫だと思いがお前らは何かあったらフォローよろしくな」

「ああ」

俺の言葉にジョン達は分かったと頷いた。



「ジョンさん、なんかあった？」

「え!？」

いつもの朝、私——ミラはジョンさんの顔をジーツと見つめる。

なんか最近みんなの様子がよそよそしい。楽しそうに話していたのに、私が近づくと、ピタッと

話を終えるのだ。

いつも通り優しくはあるが、どこかぎこちない。

「な、何もねえよ。ほらそれよりも飯食いにいくぞ、早くカートに入れ」

「うん」

私は臍に落ちなかったが、仕方なくカートに乗り込んだ。

そして食堂に着くとこれまたおかしい。いつもなら賑やかな食堂が今日はなんかシーンとして
いる。

食器のカチカチとなる音が聞こえるくらいみんな黙って食べている。

もしかして看守がいるのかと思い、私はジッと身を固くして音を出さないようにした。

しかしいつも通り厨房に着くと、カートから出てもいいと言われる。

「なんか今日静かだね」

そう言いつつ外に出ると、厨房の奥の部屋で箱を開けられたようだ。

周りを見るとビオスさんとジョンさんしかいない。

「あれ？ 厨房に誰がいるの？」

私は声を落として聞いてみた。

「いや、俺がミラに用があつてここに来てもらったんだ」

ビオスさんがすまんなと笑う。

「じゃあ俺は外で待つてるな」

ジョンさんはそう言うのと部屋を出ていく。私はなんとも言えない空気に嫌な感じがした。

「ビオスさん、なんかあった？」

「実はな、俺の出所が決まったんだ」

「しゅっしょ？」

聞きなれない言葉に私は聞き返す。

「出所ってのはこの収容所を出る事だ。普通の生活に戻るってやつだな」

「え？」

私はビオスさんの言葉をすぐに理解出来なかった。

ここでの生活が当たり前になりすぎて、ここが収容所という事を忘れそうになっていた。

でもかつて、みんなは罪を犯してここに入れられているとローガンさんに教えられた事がある。

だからいい人ばかりではないから気をつけるようにと。

でも私に関わったみんなは優しくて温かい人ばかりで、そんな事すっかり頭の中から消えていた。

「じゃ、じゃあビオスさんは……ここからいなくなるの？」

私は緊張から息を呑み込んだ。

「ああ」

ビオスさんの少し寂しそうな顔を見て、私はじわつと涙が溢れた。

「な、なんで？ だってビオスさんずっとここにいるって、ずっと一緒に料理しようって……」

私はいろんな感情が溢れ出して何も言えなくなる。

「ミラ、すまん」

ビオスさんは泣く私をギュツと抱きしめる。

「うううっ！」

私はビオスさんを両手で押して拒絶した。何も考えられずにとりあえずここから逃げたかったのだ。

ビオスさんを押しのけると扉に走り部屋を飛び出た。

するとそこには心配そうなジョンさんが立っており、私を見て驚いた顔をする。

私は泣き顔を見られた事がなんとなく恥ずかしくなり、逃げようとする。

それをジョンさんが止めた。

「ミラ、落ち着け！」

「やあー！ やだー！」

私は赤子のように駄々をこねながら暴れた。

「お願いだミラ、落ち着いてくれ。看守に見つかっちゃう！」

そう言われると声を出したら駄目だという気持ちと、どうでもいいという気持ちがかっちょごちゃになった。

「ふうー！」

鼻息を荒くして自分の手を噛みながら叫ぶのを必死に抑えた。

「ミ、ミラ！」

ジョンさんが口から手を離そうとするが、ギュツと噛みついたまま私は固まっていた。
「大丈夫か!？」
するとビオスさんが慌てた様子で部屋から飛び出てくる。

でも今はビオスさんの顔は見たくなくて、ジョンさんの胸に顔を埋めた。

「ビオス悪い、とりあえず今日はミラを部屋で休ませてくる」

「ああ、よろしく頼むジョン。みんなには俺から話しておく」

二人の会話も聞きたくなくて私は必死に耳を押さえた。

そのままジョンさんの部屋まで戻ったのだが、私は誰にも会いたくないと布団にくるまり一人泣いていた。

その日、ジョンさんは仕事をロイズさんに頼んで休ませてもらったようだ。

ジョンさんは何度も私に声をかけてきたが、私はジョンさんの事を無視し続けた。



「ジョン、ミラはどうだ？」

俺——ジョンは心配そうなビオスの質問に言葉を詰まらせた。

あの後部屋に戻ったのはいいものの、ミラは口を利いてくれず、仕方なく他の四人にミラを任せ、厨房まで戻ってきていた。

「い、いや今はミラもパニックになってるだけだ。少し落ち着けば分かってくれる」
俺は慌てながらビオスに返した。

「ミラは聞き分けがいい子だ、それをあんなに傷つけて……俺は」

ビオスはここに来て初めて見せるほどに弱った顔をしている。

「ビオスのおっさん」

俺はビオスの肩をポンと叩くと、何かあればまた知らせると帰らせた。

少しして今度はローガンとメイソンが顔を出した。

「それでミラは？」

メイソンの問いに、俺はフルフルと首を振る。

「せめて食事だけでも食べてくれるといいのですが」

「あの年で食事を抜くのはよくない、このままなら何か手を打たないとな」

メイソンが渋い顔しぶをして悩んでいる。

「夜には落ち着いて何か食ってくれるかもしれん。あの食いしん坊のミラが何も食べないでいられんだろ」

俺が心配するみんなを励ますように言うと、二人も「そうですね」と少し笑顔を見せた。

しかしその日の夜になってもミラは食事を取らなかった。

話しかければ少しは返事をするようになったが、食欲がないと何も口にしないのだ。

ミラが寝たのを確認すると、ハーパーにミラの監視を頼み、俺達はロイズ看守の計らいで皆でメ

イソンの所に集まった。

「いつもは聞き分けのいいミラがこんな事になるとは……」

ローガンの言葉に俺達は頷く。

「日頃からわがままも言わないし、癪かんじだつて起こさないからな。どうしていいやら」
悩んでいるとロイズ看守が口を開く。

「ミラちゃんは確か五歳だよな？ それなら日頃のミラちゃんが異常なんだよ。普通の五歳の子はわがまを言うし、言う事は聞かないし、好き嫌いはするし……」

同い年の娘を思い出しているのか、ロイズ看守は言葉を続ける。

それを聞いて、俺は確かにと思った。

「いつも大人びていい子だから忘れていましたね。確かにミラはまだ小さい子供でした」

ローガンがそう呟くと、俺達も頷く。

「普通なら、行かないでとか、やだとか、わがまを言うもんさ。俺も仕事に行く度に娘に泣かれたもんだよ。でもミラちゃんは必死に耐えて一人で我慢しようとしてるんじゃないのか？」

ロイズ看守に言われ、俺はしばし考えてから頭を下げる。

「帰ったらゆっくり話してみるよ。ありがとう」

「ビオスの方も凄いショックを受けていますから、そっちのケアは私とメイソンでします。あなたはミラをよろしくお願いしますよ」

ローガンの言葉を最後に、この日は一度解散となった。



ミラの監視を頼まれた僕——ハーパーは、ミラとノアと一緒に、ジョンの牢屋にいた。
「よっと！」

僕はジョンのベッドに寝転がり、少し離れたところにあるミラ用のベッドを見つめた。
どうやら、ミラは眠っているらしい。

ノアが心配そうに寄り添うとミラが身じろいだ。

「ノア、ミラを起こすなよ」

小声で声をかけると「ビッ！」とさらに小さな声で返事をする。

「え？」

その言葉を聞いて僕は体を起こした。ノアが言うにはミラが起きていると言うのだ。

「ミラ、起きてるの？」

僕がそつと声をかけると小さく頷いた。

「そっか、お腹空いてない？　なんか持ってこようか？」

ミラは小さく首を横に振る。その間こっちに顔を向ける事はなかった。

僕はそのまま話しかける。

「僕さー、エルフじゃん。だからみんなより長生きなわけ。だから結構いろんな奴を見送ってきた

んだ」

するとミラが気になったのか、チラッとこちらに体を動かした。

僕はそれに気がつかない振りをして話を続ける。

「人間って寿命があつという間でさ、今度会った時に話そうって思ってたら、いつの間にかそいつ死んじゃってた。なんて事多くてさ」

「それ……寂しいね」

ミラからようやく反応があった。

「そうだね。だから僕は人間の友達を作りたくなくてさ、やっぱり別れは悲しいじゃん」

僕が苦笑いすると、ミラがコクリと頷いた。

その反応にいい子だなと思いつつ話を続ける。

「ここに入ってからそれは同じで、僕は壁を作ってた。たまに話しかけてくる奴はいても、そいつを仲間なんて思っていないかった。だから僕はいつも一人でいたんだ」

するとノアが僕に突進してくる。

「いてて！　あつノアは別だよ、お前は家族だろ？」

「ピー！」

ノアが「よし！」と言うように頷くとまたミラの傍に戻った。

その様子にミラがクスッと少し笑う。

「そう、僕にはノアだけいればいいって思ってた。でも最近、別れるのは悲しいけどそれでも関係

を持ちたいって奴らができちゃったんだ」

「それって」

ミラが顔をあげる。その顔は少しやつれているように見えた。痛々しい赤く腫れた^は瞼を見て、チクツと胸が痛む。

しかしそんな事はおくびにも出さずに笑顔を見せた。

「うん、ミラと、ジョンにローガンにメイソンにビオスに、あとは僕が所属する農産部の連中とか……要するに、この囚人の奴らだね」

ビオスの名前を出すと、ミラの顔が曇^{くも}ったが、構わず続ける。

「関係を持たずに別れた時の悲しみを軽減させるより、そいつらと今の時間を一緒に生きたいって思っちゃったんだよね」

「……それって私のせい？」

「違うよ、これは僕の意思。確かにきっかけはミラ、でもそれを決めたのは僕。だから後悔はしない、だって今、長く生きてきたどんな時より楽しいもん」

「ハーパー……」

「だからさ……ミラも」

フツと気配を感じて話を終えるとジョンが帰ってきた。

するとミラがまた布団に潜り込んでしまう。

「ハーパー悪かったな」

「いいや」

僕は立ち上がると少しミラの傍に寄った。

「後悔しないようにね」

ピクツとミラが反応するのが分かった。

「なんか言ったか？」

「いや、おやすみってね」

僕はそれだけ言うと、自分の牢屋へと戻った。

◇

ハーパーの話を聞いた夜、私——ミラはなかなか眠れずにいた。

ジョンさんは寝ているのか、ただ無言でベッドに横になっている。

ノアはハーパーと帰らずにあのまま私の傍にいてくれた。

ギュッとノアを抱きしめながら、ハーパーの言葉を思い出していた。

私も分かっているのだ。

ビオスさんがここを出るのはいい事で、喜ばなければいけないんだと。

でも心が素直に喜べないでいた。

こんな気持ちを持つちゃいけないと思いつつ、どうにも出来なくて苦しかった。

「うつうつ……」

思わず鳴咽^{おえう}が漏^もれると、ジョンさんの大きな手が優しく頭を撫でてくれる。

「我慢しないでいい、好きなだけ泣け」

ジョンさんはてっきり寝ていると思っていたが、それは違ったようだ。柔らかい声をかけられ私はどんどん涙が溢れてきた。

「うわあー！」

気持ちを抑えきれず、看守の事も気にせず大声で泣いてしまう。

すると二棟^{とち}の囚人達が一斉にいびきをかきだした。

「ぐおー！」

「ぐーぐー！」

「むにやむにや！」

「あいつら……」

ジョンさんがその様子を見て、小さく笑いつつ続ける。

「みんながうるさいから大丈夫だ、好きなだけ泣け。そして言いたい事全部吐き出してみろ」

「ジョンしゃーん！」

私は久しぶりに大声で泣くと胸の内を全て吐き出した。



「スー……スー……」

ミラは自分の気持ちを吐き出した後、俺——ジョンの胸元で眠っていた。

泣いてるもんだからわけが分からない言葉もあったが、どうやらピオスの出所を素直に喜べない自分が嫌になったような事を言っていた。

赤く腫れ上がった臉を優しく撫でながら、濡^ぬれた布で冷やしてやる。

「ジョン、ミラちゃんは何？」

すると、周りの囚人達が心配して声をかけてきた。

「今は泣き疲れて寝てるよ。少しスッキリした顔してる。みんなありがとうな」

「ミラちゃんのためならなんでもいいさ」

囚人達も心配していたのか、少しホッとした表情をしていた。

少しして、俺は起きないミラを他の奴に預けて仕事に向かった。さすがに連日休むわけにはいかずソワソワしながら仕事をこなしていく。

そして、長く感じた仕事を終えて慌てて戻るとミラが起きていた。俺に気がつくとは慌てて抱きついてくる。

「どうしたミラ！」

いつもと違う様子に驚くと、ミラを見ていた囚人が申し訳なさそうにする。

「なんかジョンがいなくて不安だったみたいだ。すまんな役に立てなくて」

「いや、助かったよ。ありがとう」

そいつにお礼を言おうとミラが顔をあげた。

「おじさん、ありがとう。ごめんね」

顔を少しだけ出して恥ずかしそうに謝った。

「いいんだよ。ミラちゃん元気出してね」

そいつは気にした様子もなく手を振り自分の牢屋に戻っていく。

ミラは赤子に戻ったかのように俺にくっついて顔を隠していた。

「悪かったな、一人にして」

ブンブンとミラは首を振る。

「違う、待てる。でも……」

ミラは言いくさそうに言葉を切った。そんなミラに俺は目を合わせた。

「ミラ、お前はまだ子供なんだ！ だから我慢なんてしないでいい。悲しい、寂しい、嫌だって、なんでも言っていんだよ」

「でも、迷惑……」

「だから迷惑をかけろ。俺達がお前のわがままを聞けなくてどうする。俺達はお前の親だろ？」

ミラはまた涙ぐんでしまった。

「泣いていい、大声出したってここにいる奴らが昨日みたいに誤魔化してくる。お前は心配しないで好きなようにすりゃいいんだよ！」

「そうだぞミラちゃん！ いつでも泣いてくれ、俺達が誤魔化してやる」

「まかせろ！ 大声出すのは得意なんだ！」

周りの牢屋からみんなが同意するように声を出した。

「みんな、あ、あいがとー」

ミラはまた泣いてしまった。

しかし少し泣くと落ち着きを取り戻した。

そこで俺はミラの気持ちを聞いてみた。

「ミラはどうしたい？ ビオスにここにいてほしいなら手はあるぞ。多分ビオスもそうなんてもいって思ってる」

しかしミラはブンブンと首を振る。

「ビオスさんともう一回ちゃんと話したい」

それがミラからのわがままだった。

俺は頷くとちょっと待っているとミラを隠して看守を呼んだ。

その後の行動は早かった。ロイズ看守に取りついでもらい、次の日の朝ビオスとミラでまた話し合いの場を持つ事になった。

次の日、皆緊張した面持ちで朝を迎える。

ミラがビオスと話すという事は、囚人達の間にあつという間に広まった。

俺はいつものようにミラをカートに入れると、食堂に向かった。

いつもなら話しかけてくる囚人達も、今日は声をかけないでいる。

食堂では調理部の奴らに加えて、製菓部の奴らも落ち着かない様子で待っていた。

少し元気がないビオスが扉を開けると、そこにカート運び入れる。

「じゃ、よろしく」

俺はビオスにカートを預けると厨房を出ていった。

◇

ジョンさんの声がして少しすると、トントんとカートを叩かれる。

「ミラ、いいぞ」

するといつもより元気のなさそうなビオスさんが声をかけてきた。

「うん」

私はソツと箱を開けるとカートからゆっくりと出た。

私は酷い別れ方をした手前、顔を見られずに俯うつむいてしまう。

「ミラ、飯食ったか？」

「え？」

しかしビオスさんは、私が酷い態度を取った事など忘れているかのように普通に話しかけてきた。

「飯食ったか？　なんか痩やせたぞ」

あんな事なかったかのような態度に私も思わず答えてしまった。

「食べてない」

そう口にした途端お腹が「ゲー」と鳴った。

「飯作るぞ、手伝ってくれ」

そう言うとエプロンをつけて野菜を刻きざみだした。

「ミラは煮込みながら灰汁あくを取ってくれ」

「う、うん」

お鍋なべに水を入れて火にかけると、台に私を乗せてくれた。

その後は二人で真剣に料理をする。

なんか料理をするのが久しぶりな気がして少し楽しい。今は嫌な事も忘れられた。

「スープを仕上げてくれ、俺はパンを焼く」

「うん、味つけは？」

「任せる」

「はい！」

いつものように声をかけ合いながら仕上げていくと、あっという間に料理が完成した。出来上がったのは、コーンスープにふわふわのパンだ。

すると、とある事に気がつき、咄とつ嗟さにビオスさんを見つめる。

ビオスさんは優しい顔で私を見つめ返してきた。

「初めてミラと作った料理だな」

その言葉に、ビオスさんとの思い出が蘇^{よみがえ}ってきて、また寂しい気持ちになってしまった。

「ビオスさん、私」

「おっと話の前に腹ごしらえだ。俺は腹減ってんだ」

ビオスさんがお腹をさする。

「私も」

私達は二人きりで食事を取った。

久しぶりのご飯は美味しかった。あの時より食材も良くなってるし、手順も洗練^{せんれん}されたはずなのに、どこか懐かしい味がした。

「美味しい……」

「美味しいな！」

私がボソツと呟くと、ビオスさんがニカツと笑い答える。

そしてそのまま食べ終わると、私はスプーンを置いた。

「ビオスさん、この前はごめんね」

「いや、俺の方こそミラの気持ちを考えずに言っただけで悪かった。それで俺も考えたんだが、看守長に言っただけで元に戻してもらおうと思ってる」

「え!？」

私は驚いてビオスさんを見つめる。

「本当ならもっと先の出所だったんだ。だから気にするな」

ビオスさんはなんでもない様子でそう言った。

でも、私は色々考えたあと、ゆっくりと首を振った。

「うん、やっぱりビオスさんはちゃんと自由になって。本当は悲しいし寂しいし、ずっと傍にいてほしいけどビオスさんの自由を奪う事したら私、一生後悔する」

「ミラ……」

ビオスさんが寂しそうな顔をする。

「でも一つお願い聞いてくれる？」

ビオスさんが「なんだ？」と聞いた。

「また、会いたい！ 会いにきて！」

私のお願いにビオスさんは泣きそうな顔で頷く。

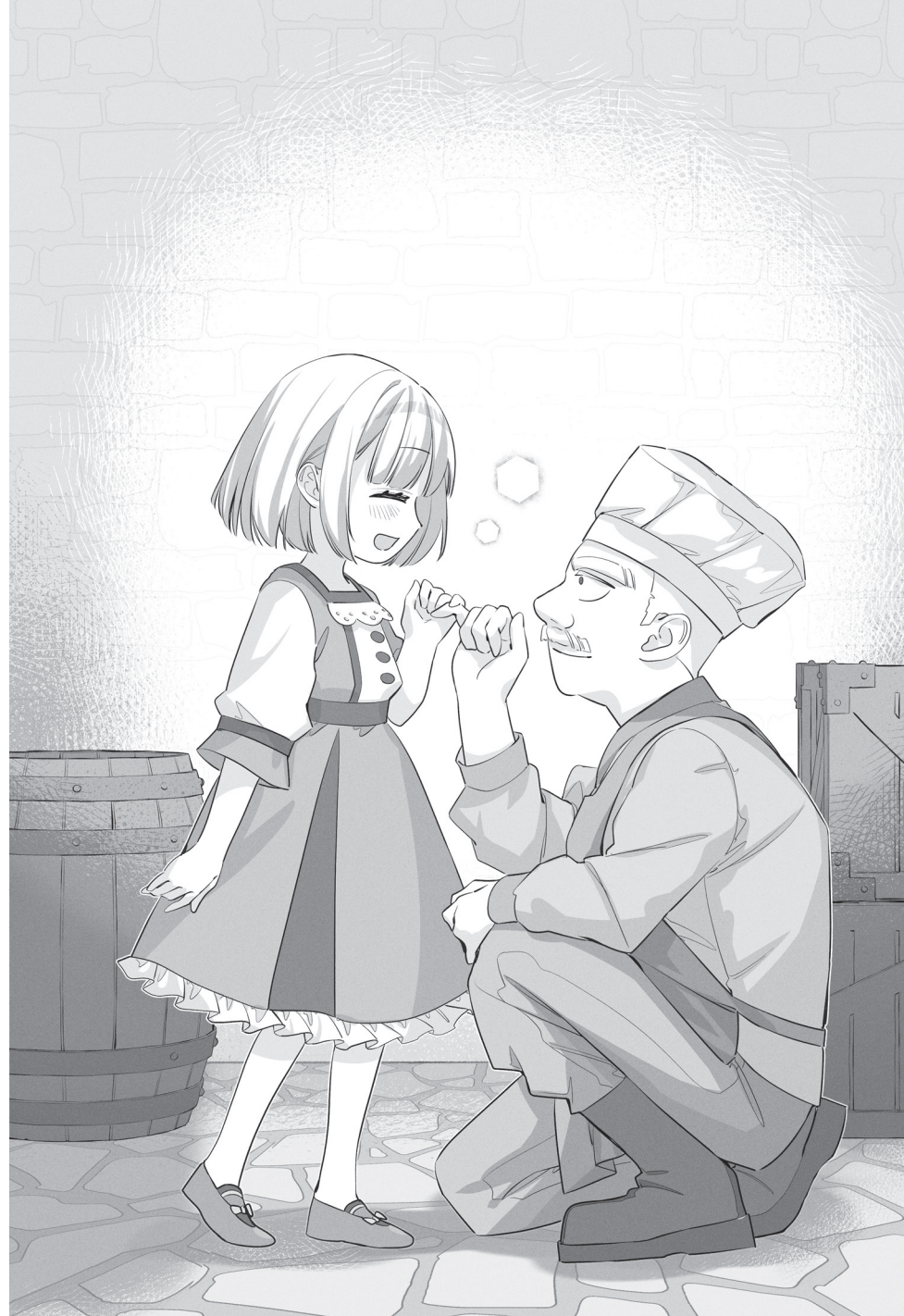
「ああ！ もちろんだ。絶対に会いにくる！ なんだって俺は自由なんだ、ミラに会いにくるのだって自由だ！」

約束だよとビオスさんと小指を絡めた。

すると、その直後に扉がノックされた。私達はビクツと構える。

でも「いいですか？」というローガンさんの声が聞こえ、胸を撫で下ろす。

ビオスさんがドアを開けると、そこにはジョンさんとメイソンさんとハーパーもいた。



「その顔は……どうにか仲直り出来たんですかね？」

ローガンさんの問いに私が頷くと、ホッとした顔を見せた。

「どういう話で落ち着きましたか？」

ビオスさんがさっきの話を伝えると、ジョンさんが私の頭に手を置いた。

「本当にいいのか？ ビオスに罪を着せてここに残すのなんてわけないぞ？」

ジョンさんが冗談っぽく物騒な事を言ってくる。

「大丈夫。それにビオスさん会いにきてくれるって約束したもん」

「確かに、その手がありましたね」

すると、ローガンさんも確かにと頷く。

「なんならビオスと一緒にミラが外に出てもいいんじゃない？」

ハーパーがしれつと言うとみんなが無言になった。

「それって俺達がミラに会えなくなるって事か？」

ジョンさんが恐る恐る確認する。

「まあそうだな。俺はそれでもいいぞ」

ビオスさんがいいなと笑うと、ジョンさんが慌てた様子で私を抱き上げた。

「ミ、ミラ!? お前外に行きたいのか？」

不安そうな顔で聞いてきたので、私はジョンさんの首に手を回して抱きついた。

「ううん、私はやっぱりここにいたい。ビオスさんも好きだけど今はまだここがいい」

そう言つてジョンさんの胸に頭をピッタリとつけた。するとジョンさんが離さないと言うようにしっかりと抱きしめてくれる。

ここが私の安心する場所だ。

「なんか妬けるな」

ハーパーが後ろからからかうように声をかけてくる。

「ハーパーうるさい！」

私はいつものようにハーパーに「ベー！」と舌を出した。

「ミラ、ジョンだけでいいんですか？ 私の所でもいいんですよ」

「私でもな」

ローガンさんとメイソンさんがおいでと手を広げる。

私は笑顔で二人にも抱きついた。

「えー？ じゃあ僕は？」

ハーパーが笑つて両手を差し出す。

私は仕方ないとハーパーにも抱きつくと言元で囁いた。

「ハーパーありがとう。私、後悔しないですんだ」

ハーパーは優しく微笑むと、ギョツと抱きしめてくれた。

私の落ち着いた様子を見て、みんなは仕事に戻っていった。

私とジオスさんは今日は仕事を休んでいいとの事で、この厨房で過ごす事になった。

「それでいつここから出ちゃうの？」

「四日後だな」

「四日！」

私はあまりの短さに声を上げた。

「ミラに話した日の前日に一週間後に出所だと言われたんだ」

「そっか、私あのままいじてたら、ジオスさんにちゃんとお別れも出来なかったんだね」

そう考えるとこうして早めにお話し出来て本当によかったと思う。

「ああ、あいつらに感謝しなきゃな」

ジオスさんを見ると真剣な顔をしている。

本当にちゃんと話せてよかった……。

「それとさっきの話だけど、ミラが良ければ俺とここを出てもいいからな。前にもロイズ看守と一緒に外に出た事があっただろ？」

「うん、ありがとう。でも私、ジョンさん達を置いていけない」

「そうか」

ジオスさんは私の答えが分かっていたように頷いた。

それからジオスさんと色々な話をした。ほとんどは料理の話だ。

ジオスさんが今度働くかもしれない場所で困らないように、知っている知識を伝えた。

「本当にお前は凄いよ」

ビオスさんは私の話を聞いて感心している。

「ううん、凄いのはみんなだよ。私は知識あるけどそれを作れないもん」

ビオスさんは「ああ」と心底ガッカリしたように肩を落とした。

「ミラの下でもう少し料理の勉強をしたかったぜ」

「また会いにきてくれた時に色々教えるね!」

「ああ、絶対だ」

私とビオスさんは固く手を結んだ。

その後、ビオスさんが外に出た後の予定を話してくれる。

「とりあえずは五年、看守長の指定する場所で働けらしいが、まだ詳細を聞いてないんだよな」

「でも料理を作るところでしょ？」

「多分な」

また何か分かったら絶対に伝えると約束して、私はビオスさんと別れる前にたくさんお話をすることが出来た。

◇

その後はビオスさんの出所の準備が忙しく、なかなか会えない日が続いた。私との事もあり、ほとんど準備をしていなかったので大変だったようだ。

そしてあつという間にビオスさんが出所する日が来てしまった。

「はあ……」

私は今日が近づくにつれて憂鬱ゆううつになっていた。

ちゃんとお別れする前に仲直り出来たが、やはり別れるのは寂しい。

しかも私の存在は看守には内緒だからちゃんと見送る事も出来ない。

ロイズさんの計らいはかで朝、出ていく前に食堂で少しだけ話す機会を作ってもらったのだ。

ジョンさんに連れられ食堂へと向かう。

カートの中にいながらため息を止められずにいた。

「はあ」

「ミラ、大丈夫か？」

ジョンさんが心配して声をかけてきた。

「う、うん大丈夫! ちゃんとお別れしないとね」

私は自分に言い聞かせるように答えた。

「もう着くぞ」

そう言われて口を閉じると、食堂に着いた。カートから出るとビオスさんが待っている。

いつもの白いエプロンはつけておらず、ジャケットのようなものを羽織り、大きな鞆かばんを持っていた。

いつもと違う雰囲気、本当に最後なんだと思い知らされる。

「ビオスさん……」

言葉を詰まらせてしまうと、ビオスさんの顔も曇ってしまった。

私は慌てて声をかける。

「ビオスさんかっこいい！ コック服もかっこいいけど、その姿も素敵でびっくりしちゃった」

私の明るい声にみんながホッとする感じがした。ビオスさんも少し寂しそうに笑うと「そうだろう！」とおどけている。

「そろそろ時間だ」

すると外で待機してくれているロイズさんから声がかかる。

「ミラ、最後に抱っこさせてくれ」

ビオスさんは荷物を置くと私の前で両手を広げる。私はギュッと抱きしめた。

「ビオスさん、元気でね。私の事忘れないでね」

「当たり前だろ！ ミラこそ俺の事忘れるなよ」

「うん！」

私は精一杯の笑顔を見せて頷いた。

その後すぐにロイズさんから声がかかりビオスさんは連れられて出ていった。

「バイバイ！ またねー」

私は笑ってビオスさんを送り出した。

そして扉が閉まると振っていた手をソツと下ろす。

「うっうっ……」

ビオスさんが見えなくなった途端に涙が溢れた。

「ミラ、頑張ったな」

ジョンさんがよくやったと頭をガシガシと撫で回す。

「さみしーよー」

私はジョンさんに抱きつくのと、その日は泣いて過ごす事になった。

三 新たな挑戦

俺——ビオスはミラと笑顔で別れるとロイズ看守に連れられて収容所の出口へと向かおうとした。すると後ろから微かにミラの泣き声が聞こえ、俺は思わず振り返る。

「凄いい子だな、最後まで笑顔で見送って」

ロイズ看守が立ち止まり俺が歩き出すのを待ってくれていた。俺は頷き返す事しか出来ない。

何か言葉を発したら涙が溢れだしそうだった。

その後少し落ち着くと歩きだし、囚人達の棟を移動しているとみんなが声をかけてくる。

俺は適当に手をあげて応えながら通りすぎていった。

そして製菓部の囚人、トールの牢屋の前を通る時、目配せをして一言告げる。